

「おじいちゃんの手紙」二十通目（平成二十五年八月）

真夏の八月。蝉の鳴き声が夏を盛り立て、川のせせげが涼を運んでくれます。

元気なおじいちゃん



お経に伺うと、いつもニコニコと笑顔で迎えてくださるおじいちゃんがいます。何も知らなければ本当に元氣とうななおじいちゃん。実際にご自身でも「元氣です」といっておっしゃいます。

実は、このおじいちゃんは九年前から大病を患っており、大きな手術を何回もされています。病氣になてからは、普段の生活はガラリと変わり、当たり前前にごまかいたことができなくなり、恥ずかしさや悔しさや情けなさを感じることもたくさんあったと言います。お話を聞けば聞け程、日常生活の大変さが私には伝わってきました。しかしそれでも、おじいちゃんは「ニコニコと笑顔を見せ、自分は元氣だ」と言っているのです。

郷音の言葉、しなやかな心

「大病をして、いろんなことが以前と比べて不自由になりました。でも元氣です。病は患ったままですが、気持ちには元氣なんです。時間ばかりでしたが、この病も自分の一部分だと思えるようになりました。そこから、上手に付き合いつながり、一緒に生きていこうと考えています。だから、身体は確かに病んでいますがいには元氣だといっています。」おじいちゃんの強い想いが、この言葉からも伝わってきました。「すごいなあ」と私が感じていました。

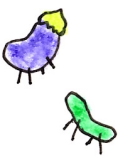
「このように思わせてくれて、私の気持ちを支え続けてくれたのは、周りの人たちです。特に、家内は本当によくしてくれています。おかげさまで、毎日元氣に過ごせる今の自分があります。」と続けて語ってくれたのです。ガツンと心に響いた言葉でした。

その場には、奥さんも同席して話を聞いていました。でも、おじいちゃんは、決して奥さんの方には目をやりません。その姿は、普段なかなか伝えられない感謝の想いで私を通して奥さんに伝えられているように見えたのでした。奥さんは何も言わず、この言葉を聞きながらニコニコと笑っています。とても素敵なお夫婦。

お二人がこのような境地になれるまでには、きっと多くの心の葛藤や苦しみがあり、お互いにあるだろうと想像できます。しかし、その暗いトンネルと共に通り抜けたからこそ、この今があり、前述の言葉が生まれると思えます。「このお夫婦は、苦楽と共に合わせて、しっかりと心の絆が結ばれているのだろうなあ」と私は深く感動したのです。

「お上人さんと話していたら、普段話さないようなこととつながり話していました。」そんな言葉と共に照り笑って話せば、お茶を飲むおじいちゃんはなんとも可愛らしく見えたのでした。

又逢いにゆく



私は、お盆になると必ずおじいちゃんと交わしたこの会話を思い出しています。おじいちゃんは二年前にせくなり、今は以前のようなお話をすることはできません。しかし、不思議に思われるかもしれませんが、じつとこのころの会話は今もどこかあります。もうすぐお盆。今年もこの会話を思い出して、またおじいちゃんに逢いに行きます。